

## ドキュメンタリーDVD 上映会&講演会 IN 愛知(4)

林京香さん、智宏さんが「分けない社会は、分けない教育から家族が12年間で感じてきたこと」をビジュアルに話した。写真は京香さんによる挨拶・自己紹介から。林さんの話は何回か聴いて、コメントや注文もしてきたが、今回はポイントを押さえ分かりやすかった。京香さんの小学校入学から6年間で「総括」し、成果と課題を提起する内容だった。



まずインクルーシブは社会のあり方。思い込みや発想を「クルッ」と変える。「クルッ」とつつみ、だれも排除しない学校、地域を。じつは12月4日「集い」で、私は苦しみながら、インクルーシブを「くるーしぶ」と説明したが、あまり反応はなかった。さて今回は？ 押富さんも指摘したが、医療的ケアは「生活支援行為」。人の態度や習慣、制度が障害をつくりだす。こうした「障害の社会モデル」の注目したい。

学校でともに生活する中で、子どもたちからアイデアや工夫が生まれる。一緒にできないときは、ちがう役割をもって参加。どうしたらできるかを考え、工夫する。移動のバリアをつくらないことも大切。がんばらなくても地域の学校へ。校外学習や宿泊行事はまだ課題あり。ここでも「障害の医学モデルから社会モデルへ」の転換が課題。

子どもと共に学んできて感じること―「同じであるべきこと」と「違っていいこと」。主体は障害当事者であり、本人の支援を。「導こう、教えよう、救おう」から「聞く、学ぶ、寄り添う」に重点を。教職員、介助者の連携、すき間のない支援を。障害の軽重で区別しない。インクルーシブ教育は障害者だけの目標ではない。保護者の協力とは、学校での「親の付き添い」ではなく、学習への参加、介助のアイデアを学校と連携すること。6年間の「成果」とともに、まだまだ課題は多い。道半ばだ。

講演では、京香さんの学校生活が多くの写真から紹介されたが、私もこれまで3回見学してきた運動会について感想を述べたい。今年の運動会でも、赤組「応援団」で活躍。徒競走の審判など、6年生として重要な役割を果たす。



京香さんの「居場所」がきちんとある感じだ。京香さんに合わせた役割が工夫され、級友や教職員たちもそれを応援しているように感じた。3年目の今年は、級友たちとも握手して別れた。私にも「居場所」が。



インクルーシブ教育が障害者だけでなく、級友たちをはじめ、多くの生徒や教職員に「刺激と力」をあたえているのを運動会からも実感できた。さらに続く。

(2017年6月30日)